

実践事例

(環境) 形埜小学校 5年

形埜の森 共生プロジェクト

～猪・鹿解体施設の見学を通して～

10月～11月(11時間)

1 ねらい

本校は、豊かな緑に囲まれた学校である。この恵まれた環境を子どもたちの学習につなげようと、学区の自然環境の教材化を図っている。本校の敷地のすぐ近くには乙川が流れている。子どもたちは、昨年度4年生の時に、この「川」をテーマに木の芽学習を進めてきた。そして、本年度は、その川を生み出す「森」について学習を進めていくことにした。形埜地区は、その大半が「森」である。この環境を生かし、「森」の持つ魅力やそこに関わる人々の思いに触れることによって、子どもたちは、「森」を守っていくことの大切さや必要性を学んでいく実践を試みた。

子どもたちは、4月から「森」について学習を続けてきている。4月には乙川の源流を探しに行き、森から川が生まれていることを知った。また、学校周辺の森の調査活動をする中で、「間伐」について知り、9月には間伐体験を行っている。本小単元では、森の中に存在する「木」から「動物」へと子どもたちの視点を移し、野生動物との付き合い方を考えていく。野生動物の命と人間との共存のあり方を考える教育である。また、親や親戚が山を所有している本学級の子どもたちにとってみると、本実践は、環境教育にキャリア教育が加わったものだとも言える。



▲間伐体験をする子どもたち(9月)

2 実践の概要

①さつまいも掘り体験で野生動物による被害を知る

10月、全校でさつまいも掘り体験を行った。さつまいもを育ててくれた学区の農家の方から、「これくらいの広さの畑なら、一晩でやられてしまう。」とイノシシによる農作物への被害について教えてもらった。この話を聞いて児童Aは「鉄砲を使える人を読んで撃ち殺す」、児童Bは「撃ち殺して解剖して食べたい」という感想を述べた。

②家の近くでの野生動物による被害を調べる

子どもたちに話を聞いてみると、自分の家の畑も被害にあっていると言う。児童A・Bのように過激な感想を持つのも納得できる。そこで、どのような被害があるのかをそれぞれで調べる活動を行った。調べたことを発表し合ってみると、近年、かなり多くの被害が出ていることやそのための対策を講じなければならなくなっていることが分かった。児童Cは、「スギやヒノキは食べられないから、野生動物による農作物の被害が増えたのだと思う」と発言し、今まで学習してきた「森」の間伐の問題と関連付けた仮説を立てた。この児童Cの発言によって、今までの「森」の学習と野生動物による被害を追っていた本小単元が、子どもたちの中で一つにつながった。

③猪・鹿解体施設を見学する

本学校では、行事の際に、夏山町に住むNPO法人中部猟蹄会の日浅一さんをお招きし、イノシシの肉を使ってしし汁などを振舞っていただく機会がある。そこで、お世話になっている日浅さんの猪・鹿解体施設を見学してみてはどうだろうかということになった。

見学直前、野生動物に対する子どもたちの思いは、意見が分かれていた。児童Cらは「優しくしたい」という意見であるのに対し、児童A、Bたちは「殺して食べたい」という思いを持っていた。

見学は、まず日浅さんのお話を聞き、子どもたちから疑問に思っていることを日浅さんに質問しながら学習をしていった。次に、施設を見て回った。捕獲用の檻、そして、解体施設である。処理途中の3頭のイノシシがぶら下がっており、その解体の様子を日浅さんが実演してくださった。児童Bは、実際にナイフを使って体験までさせてもらった。そのときに、児童Bは、日浅さんから「食べたいだけで殺してはいけないんだよ」と教えていただいた。このことが児童Bにとって、強く心に響いたようであった。



▲イノシシの解体体験をする児童B

④見学で学んだことから野生動物との付き合い方を話し合う

見学後、話し合いの授業の機会をもった。見学して分かったことの意見を出し合った後、野生動物とどう付き合っていくべきかも話し合った。日浅さんの思いに対する理解を深める中で、子どもたち自身の考えも深まっていった。「いっしょに生きていきたい」「人と動物がバランスよく生活できるといい」などの意見が出た。児童Bは授業の中で、「(日浅さんは) 猟師なのにこんな気持ちを持っているんだな」と思って、『殺して食べたい』気持ちから少し離れた」と気持ちの変化を述べた。このことは、野生動物の命を考えることができるようになったということを示していると言える。また、この授業では、野生動物が人里に来て農作物を荒らす原因は、山の手入れが行き届いていないからだということから、これまで子どもたちが学んできた「森」の環境をもう一度考えることにも結び付いた。このことは、授業後に児童Aが描いた4コマ漫画にも見て取れる。



▲児童Aが描いた4コマ漫画の1コマ

3 実践を振り返って

見学前に児童A・Bらが主張していた「野生動物を殺して食べたい」という考えは、ともすれば野蛮な意見に聞こえるが、見方を変えると日浅さんの「自然からもらった命は最後までいただくべきだ」という考えと合うところもある。ただ、自分の「食べたい」という欲求だけでそう考えているのか、それとも、自然の命を考えたらうでそう主張しているのか、というところで大きく違ってくる。先に述べたように、今回の実践を終えて、児童A・Bらは、命の大切さを学ぶことができた。また、野生動物と共生するためには、森の手入れが必要だということも学習できた。これらは本実践の大きな成果である。見学から約2か月後に日浅さんに宛てて書いたお礼の手紙には、右のような記述がみられた。

児童A…「(野生動物を)うち殺してくれないかなと思っていたけど、見学に行って、自分たち人間が環境をあらしているからすみかがなくなるのだなと思いました。」

児童B…「これから、ぼくは、山を大切にしようと思います。」

やがて子どもらは、この地域の森の持ち主となるであろう。本実践で見られた子どもらの考えの深まりが、将来にわたって環境を守る人の育成につながったことを願いたい。